「少年老い易く学成り難し」詩の作者は観中中諦か

朝倉　和

はじめに

偶成　　朱熹

少年易老学難成　　少年老い易く　学成り難し
一寸光陰不可軽　　一寸の光陰　軽んずべからず
未覚池塘春草夢　　未だ覚めず　池塘春草の夢
階前梧葉已秋声　　階前の梧葉　已に秋声

この、漢文入門の教材として人口に膾炙し、はたまた起承句が慣用句として親しまれている「偶成」詩が、実は朱子（朱熹、一一三〇～一二〇〇）の作ではなく、和製で、しかも近世初期以前の禅林僧侶の手に成るか、とセンセーショナルなご発表をされたのは、柳瀬喜代志氏である。さらに、岩山泰三氏は、当該詩の作者として、室町前期の代表的な五山詩僧の一人である惟肖得巌〔一三三六～一四三七〕を指摘された。それらの反響は大きく、例えば『広辞苑』や、小学館の『日本国語大辞典』は版を新しくするに当たって、両者の意見を取り入れ、以下のように「少年老い易く学成り難し」項に改訂を加えている。傍線は私に施した。以下同じ。

○『広辞苑』第四版第一刷（岩波書店、一九九一年一一月）

少年老い易く学成り難し〔滑稽詩文、寄二小人一詩。一説に、朱子の作とされる偶成詩の句〕月日がたつのは早く、自分はまだ若いと思っていてもすぐに老人になってしまう。それに反し学問の研究はなかなか成しとげ難い。だから、寸刻を惜しんで勉強しなければならない。

○『日本国語大辞典』第二版　第七巻第一刷（小学館、二〇〇一年七月）

しょうねん老(お)い易(やす)く学(がく)成(な)り難(がた)し　若いと思っているうちにすぐに年老いてしまい、志す学問は遅々として進まない。年月は移りやすいので寸刻をおしんで勉

強せよということ。補注　朱熹の偶成詩「少年易レ老学難レ成、一寸光陰不レ可レ軽、未レ覚池塘春草夢、階前梧葉既秋声」からとされているが、朱熹の詩文集にこの詩は見られず疑問。近世初期に五山詩を集成した「翰林五鳳集―三七」には、「進学軒」の題で、室町前期の五山僧惟肖得巌の作としてこの詩が収録されている。

双方の記述を見ると、実は出典の認定が異なっており、この作者問題はいまだに流動的で、決着が付いていないような印象を受ける。

稿者は現在まで、絶海中津〔一三三六～一四〇五〕に関して研究を進めて来た。絶海は室町前期に活躍した禅僧で、義堂周信〔一三二五～八八〕とともに、その漢詩文を「五山文学の双璧」と讃えられているのだが、この度、彼らと交流のあった観中中諦〔一三四二～一四〇六〕の詩文集である『青嶂集』の中に、「少年老い易く」詩を発見した。本稿では、同詩を紹介するとともに、「少年老い易く」詩の作者や内容に関して再検討を加えてみたい。

一　柳瀬氏、岩山氏の説

はじめに先行研究を整理しておきたい。この「偶成」詩の作者（出典）問題について言及されているのは、先に触れた柳瀬氏と岩山氏のお二人である。番号は私に施した。

①柳瀬喜代志氏「いわゆる朱子の「少年老い易く学成り難し」（「偶成」詩）考」（『文学』一九八九〔平成元〕年二月号）

②柳瀬喜代志氏「教材・朱子の「少年老い易く学成り難し」詩の誕生」（『国語教育史に学ぶ』〈早稲田教育叢書2〉所収、一九九七〔平成九〕年五月）

③岩山泰三氏「「少年老い易く学成り難し…」とその作者について」（『しにか』一九九七〔平成九〕年五月号）

柳瀬氏の②は、①に新資料を加えて補筆訂正したものである。また、岩山氏が③で発表予定の内容を、事前に行われた研究会（平成五年一一月、和漢比較文学会月例会「幼学書を読む会」）の席上で、柳瀬氏が知り得たということは注意される（②の注4による）。したがって、②と③はほぼ同時期に発表されてはいるものの、当然、内容的に重なっている箇所が存する。

さて、朱子の作として伝わっている「偶成」詩が、彼の詩文集に収められていないことは、早くから諸氏の気付かれるところではあった。この詩が、同一の題名と作者名とを伴って登場するのは、わが国の明治期の漢文教科書が最初になるという（①および②に詳しい）。例えば、水元日子氏らは、朱子の詩風や詩論、哲学の性格を勘案すると、「これが果たして詩人朱子の代表作と言えるかどうか、実は疑問も残る」と述べておられる。[2] 柳瀬氏も疑問をお持ちになられた一人で、朱子の学問観とは異質であることや、表現上の稚拙さ――未熟な用語が見えたり、初学書でよく見られる典語故事ばかり

を詩語に用いていること――を、その理由に挙げておられる。後者に関して詳述すると、第一句の「少年」が「老い易」いと言うのは伝統的な詩語の用い方に合わないこと、第三句において謝霊運の故事、すなわち夢に従兄弟の謝恵連を見て、「池塘春草生ず」という佳句を思い付いたという故事（『蒙求』「霊運曲笠」等）がうまく機能していないことを指摘されている。

柳瀬氏が当初、当該詩の出典として報告されたのは、先に見た『広辞苑』の記述の中にも引用されていたように、『続群書類従』巻第九百八十一　雑部百三十一収載の『滑稽詩文』である。ただし、題名は「寄小人」、作者名は記されていない。

寄小人

少年易老學難成。一寸光陰不可輕。禾覺池塘芳中夢。堦前梧葉已秋色。

【注】「水」字は水戸彰考館本を示す。第四句の「色」字は、「声」の異体字「𢀜」の誤読か。

『群書解題』第二十二によると、同書は「室町時代末期から江戸時代初期にかけての禅林僧侶の詩文集。一巻」と解説されている（副島種氏による）。艶詩艶文や滑稽詩を集めた作品である。

詩題の「小人」は、禅林では若い僧、起句の「少年」は寵童、または若衆（男色関係にある少年の称）を表す特殊な措辞である。転句の「春草」が「芳艸（草）」となっているが、これは解釈上、問題は無く、どちらの詩語を採る場合も、謝霊運の故事は想起される。謝霊運の故事に関しては、「当時の詩文には、典故がそれ本来の意味を伝えずに、それぞれの語が有している原義を組み合わせただけの意に使っている例はしばしば見える」（①）という。参考までに氏の解釈を引用する。

「若い僧に贈る」詩であったとすれば、一篇の趣意は、「少年」は老けやすく、君の学業成就は難しい、だから片時もうかうかと過ごしてはいけない。池の堤の芳しい草のうちに結んだ夢から覚めやらぬうちに、階のまえに生える梧桐の葉は既に秋を告げて散っている。（②）

一方、岩山氏は、『大日本仏教全書』の第百四十四～百四十六巻に翻刻されている『翰林五鳳集』（以下、『五鳳集』と略す）巻第三十七・雑　乾坤門の中に、当該詩の出典を見出された。先に見た『日本国語大辞典』の記述の中にも引用されていた。ただし、題名は「進學軒」、作者は「惟肖」となっている。

少年易老學難成。一寸光陰不可輕。未覺池塘芳草夢。階前梧葉已秋聲。進學軒　　惟肖

同書は、後水尾天皇〔一五九六～一六八〇〕が、以心崇伝〔一五六九～一六三三〕らに命じて、代表的な五山詩僧の詩偈を書写集録させたものである。元和九年〔一六二三〕成立。「進學軒」とは寮舎の名称である。同書には、『扶桑五山記』や『蔭凉軒日録』でそ

の存在を確認することができる寮舎（栖鳳軒〈南禅寺〉、栖雲軒〈建仁寺〉、睡足軒〈相国寺〉等）を詠じた作品も見受けられるので、「進学軒」は五山の寮舎の一つであった可能性が強い」（③）とも、また「韓愈の「進学解」を踏まえた名称であろう。この賛も「進学解」に倣った勧学の詩意を成していると解すべきであり、ここに男色の寓意を読み取るのは無理である」（③）とも、氏は指摘される。作詩事情に関しては、「寮舎の主に乞われて、その軒に掲げた扁札に寄せた題壁、或いは詩（画）軸に記した賛かも知れない」（③）と推測されている。

「惟肖」とは惟肖得巌のことである。彼は備中の出身で、草堂得芳や蔵海性珍に師事し、摂津の棲賢寺（諸山）、山城の真如寺（十刹）、万寿寺（五山）、天龍寺（五山、第六十九世）、南禅寺（五山、第九十八世）の住持を勤めた。また、夢巌祖応や絶海に学び、特に絶海からは、四六文の作法を学んだという。[3] 彼の語録詩文集である『東海璚華集』は、『五山文学新集』第二巻に収録されている。ただし、そこに「進學軒」詩は見当たらない。このことに関して岩山氏は、つぎのように述べておられる。

ただ応永期を中心に流行した詩画軸にも惟肖の賛を記したものが目立つが、それらも多くは詩文集に未収録のものである。また『翰林五鳳集』は他の五山僧の散逸作品をも多数含むが、それらの作者についての信憑性は割合高い。例えば（中略）「進學軒」詩も惟肖の作であることを特に疑うべき理由は見当たらない。少なくともこの詩を朱子の作だとする資料が、明治期の教科書までしか遡ることができない現状では、朱子の作の誤認もしくは剽窃であると考えるのは困難である。（③）

結局、②・③を総合すると、「少年老い易く」詩は室町前期に、惟肖によって勧学詩（「進學軒」詩）として誕生し、その後異なった伝流過程を経て、近世初期に、一方は滑稽詩（「寄小人」詩）に翻案されて『滑稽詩文』に収録され（詩の主題を、勧学から男色へ転換させるところに面白味を狙った。五山文学において、時代がくだるとともに、男色を扱った艶詩が流行したことが背景にあるだろう。『滑稽詩文』には、「題少年易老」詩〈古柏和尚作〉という句題詩も収められている）、もう一方はそのまま『五鳳集』に収録された。――ここまでは、両氏の共通理解である。さらに柳瀬氏は、明治期の教科書編纂者が、『滑稽詩文』所収の「寄小人」詩を、詩題を変え、謝霊運の故事による「芳草」をわざわざ「春草」に改めて、再び勧学詩に取り戻して、作者を大儒朱熹（朱子）に仮託して権威化を図ったと指摘される（「進學軒」詩を見て、教材に採択したならば、詩題が学問を勧める言辞になる）。もしも「寄小人」詩が、朱子の「偶成」詩をパロディー化したものであるならば、当時、「偶成」詩も含めて、朱子の作品が広く読まれていた必要がある。室町五山の禅林においては、新しい学問として受容されていた

とは言え、朱子学（宋学）が、正統な学問として公認され、流行したのは、江戸時代になってからのことである。

二　観中中諦作「進学斎」詩

柳瀬、岩山両氏の説はダイナミックかつ緻密であり、示唆に富んでおり、稿者の説とも少なからず関係があるので、上記の如くその整理に、かなり紙面を費やしてしまった。ここからが本題である。稿者が「少年老い易く」詩に邂逅したのは、観中中諦の『青嶂集』（梶谷宗忍氏訳注『観中録・青嶂集』、相国寺、昭和四十八年）においてである。ただし、題名は「進学斎」、さらに転句にかなり大きな異同が見られる。

〔一四〇〕進学斎

少年易老学難成、一寸光陰不可軽、枕上未醒芳艸夢、堦前梧葉已秋声

観中は阿波の出身で、観応元年〔一三五〇〕、九歳の時に上京し、夢窓疎石〔一二七五～一三五一〕に面謁したのだが、翌年夢窓の示寂にあい、その後は関東、京都、阿波を往来し、義堂や春屋妙葩〔一三一一～八八〕に師事した。途中、応安六年〔一三七三〕、義堂の勧めにより入元したが、時恰も青巾の乱に遭い、帰国している。嘉慶元年〔一三八七〕七月に阿波の補陀寺（諸山）、明徳二年〔一三九一〕七月十八日に等持寺（十刹）に住し、その後、相国寺慶讃の十高僧の一人に列せられ、応永七年〔一四〇〇〕三月八日には相国寺（五山、第九世）に入寺した。相国寺内に乾徳院（後に普広院と改称）をはじめ、嵯峨には永泰院を開いた。応永十三年四月三日、永泰院にて寂す。寿六十五。後、性真円智禅師と勅諡せられた。『碧巌集』抄を『青嶂集』と言う説と、語録・詩文集を『青嶂集』と言う説がある。他に偈頌が一首、横川景三〔一四二九～九三〕撰『百人一首』に採られており、『三体詩抄』もある。『大日本史料』第七編之七・応永十三年四月三日条、玉村竹二氏『五山禪僧傳記集成』参照。

「青嶂集」に関しては、ここでは、仮に後者の説に従う。こうして見ると、観中と惟肖は、大体、同時期（室町前期）に活躍しているが、惟肖の『東海瑤華集』には「少年老い易く」詩は収録されておらず、『滑稽詩文』も『五鳳集』も近世初期に成ったものなので、現段階では、この『青嶂集』が、当該詩の出典として最も古い作品ということになる。ただし、永泰院は廃寺となって久しく、乾徳院（普広院）は再三灰燼に帰しているので、観中関連の作品は皆無に等しく、『青嶂集』は孤本である。その残された一本は、上村観光氏蔵本を大正三年〔一九一四〕六月に書写したもので、東京大学史料編纂所に所蔵されている。梶谷氏は、相国寺山内の普広院にある、その写しを底本にされている。

三　張耒「進学斎記」の存在

「進学斎」詩の内容を垣間見る。まずは転句が「枕上、いまだ醒めず、芳艸の夢」となっていることについて。柳瀬氏も引用されていたが、例えば『新刊錦繡段抄』(4)巻一・節序　節亭之詩三十有二首には、冠平仲の「春日の作」という詩があり、「白昼、偶々芳草の夢を成す。起き来たれば、幽興、新詩有り」という起承句に対して、「謝靈運カ。弟ノ。謝惠連ニ。永嘉西一堂ニテ。夢中ニ逢テ。池塘春草生ト云句ヲ得ル故事也。未謝靈運ノ墓ニ有レ之。新詩ハ。池塘芳草生ノ句歟。(下略)」という抄文が付してある。すなわち、当時は「芳草の夢」からだけでも、謝霊運の故事は想起されたようである。と、すると、わざわざ「池塘芳（春）草の夢」と作るのは、少しばかりまわりくどいような気がする（それこそ稚拙な印象を受ける）。しかも、当該詩では「典故がそれ本来の意味を伝えずに、それぞれの語が有している原義を組み合わせただけの意に使っている」ので、ここで謝霊運の故事を強調することに、首を傾げざるを得ない。ただし、解釈はそれ程大差は無く、枕元で、池の畔でよい香りのする草が生えるという夢から、いまだに醒めやらないうちに、とでもなろうか。

つぎに詩題の「進学斎」について。これは書斎の名称である。『青嶂集』には、この他にも寮舎や書斎を詠じた作品が含まれ（「無為軒」〔六三〕、「嵐光軒」〔一二九〕）、「進学斎」は観中周辺、例えば乾徳院や永泰院の中にあった彼の書斎を言うのであろうか。

ところが、横川が撰した、五山文学版『百人一首』には、つぎのような詩がある。同書は文明年間〔一四六九～八六〕の後半成立、中世禅林の詩僧を百人選び、各一首（すべて七言絶句）を挙げた詩選集（アンソロジー）である。

讀張父讃進學齋記　　梅室

澹泊汪洋碎語道。　　蘇公門下抜其尤。
若陳進學齋中力。　　隻手須回元祐舟。

（『続群書類従』第十二輯上）

【注】讃—神宮文庫本・国会図書館鶚軒文庫本等「潛」、汪—鶚軒文庫本「班」、碎—神宮文庫本・慶安三年〔一六五〇〕九月刊本等「辞」、道—神宮文庫本・鶚軒文庫本等「遵」、尤—版本ナシ、齋—京都大学附属図書館平松文庫本「蔵」。日比野純三氏『校本百人一首(稿)』（島津忠夫氏監修『日本文学説林』〈和泉書院、昭和六十一年〉所収）による。

この詩によると、「進学斎の記」という文章が、当時、五山禅僧の間で読まれていたことがわかる。「梅室」とは梅室圓芳（浦雲長怡—竺雲圓心—鐵舟圓般—梅室。玉村氏『五山禪林宗派圖』〈思文閣出版、昭和六十年〉による）。『続群書類従』の翻刻本には誤植が多い。日比野氏のご報告によると、「父」字に関する注記は無いが、

実は「張父、讃（潛）」は「張文、潛（張耒）」の誤謬である。張耒〔一〇五四～一一一四〕、号は柯山、字は文潛、宋の楚州淮陰（江蘇省淮陰）の出身である。蘇門四学士（張耒の他は、黄庭堅・秦観・晁補之）の一人。ちなみに梅室詩の承句「蘇公門下に其の尤を抜く」は、このことを踏まえての表現であろう。また、起句の「澹泊、汪洋、語道（遵）を碎く」は、中華書局本『蘇軾文集』巻四十九所収の「張文潛縣丞に答ふる書」に「故に汪洋澹泊、一唱三嘆の声有りて、其の秀傑の気、終に没すべからず。」とあるのに拠るだろう。張耒は徽宗の時、太常少卿になり、後に潁州・汝州の長官となった。詩は平淡であることにつとめて白居易にならい、楽府は張籍にならったという。著作に『宛丘集』『両漢決疑』『詩説』がある。『宋史』巻四百四十四、『張耒集』（中華書局）[5]の「附録一　年譜」、筧文生・野村鮎子氏『四庫提要北宋五十家研究』（汲古書院、二〇〇〇年）参照。

さて、義堂をはじめとして、多くの禅僧が閲覧し引用している、[6]宋の祝穆の編した類書『事文類聚』の中に、張耒の「進学斎の記」を見付けることができる。ここにその全文を掲げる。なお、『張耒集』巻五十においては、題名が「進齋記」となっており、本文は一部、重要な箇所が欠落している。

進學齋記　　張文潛

古之君子。無須臾而不學。故其爲德、無須臾而不進。鷄鳴而興、暮夜而休。一日之間。出則泚官治民、事師友、對賓客。入則事其親、撫其家、教其幼賤、振其族姻。與四夫誦說講辯上世聖賢之言語文章、制度服物。而燕樂則御琴瑟、布樽俎。拜府升降、酬酢相侑。勉勉汲汲、無須臾之間、不習其事、學其理、通其曲折、而服乙其訓戒甲。蓋其學無三頃刻而去其心。非特其迹然也。安居無事。精思而深念。矯揉其心志。調服其血氣。觀天地之道。察萬物之理。以究道德之微妙。而通性命死生之始終者。亦未始有頃刻之休。是故其德日進而不可止。蓋自其不息而察之、則豈特日進也哉。豈之所達、過其旦。夜所得、加於晡。豈特旦暮晡夜之別哉。一語一黙、一起居、而新故不相襲矣。自其爲士而至聖人。如三日之運於天。小之爲旦夜中晟之變。大之爲寒暑春秋之異。然微細而察之、則雖求毫釐絲忽之間而不可得。嗚呼、士之欲進於道。其勤苦勉強。蓋必如是而後至、則亦已勞矣。後世之士、其不至於聖人也、亦可知矣。古之君子、飲食游觀疾病死生之際、未嘗不在於學。士會食而問殽蒸、則飲食之際未嘗不在學也。曾晳風乎舞雩、詠而歸、則游觀之際未嘗不學也。曾子病而易大夫之簀、則疾病之際未嘗不學也。今之所謂學者、既剽盜其皮膚、攘掇其土苴。

比二於古之人一大可レ愧矣。然少而習レ之。未幾見而自以爲二業成一者十九也。冠而仕、則冠而棄レ之。壯而仕、則壯而棄レ之。以二其滅裂苟偸之習一。而亟捨二於既仕之日一。故後世之君子、大抵從仕數年、則言語笑貌嗜慾玩習之際。比二之進取之初。以レ儒自名者一。固已大異矣。古之君子、其学也。内以脩レ身、外以治レ人。所レ學愈高。所レ治益脩。而成レ功愈崇。是故君子立二於世一、則天下被二其福一。嗚呼、三代之衰。儒者之功不二大見一於世一。而生民之望二於君子一者。未レ能三厭二滿其欲一。豈非二士之學未レ至而道未レ立哉。嗟乎、民之休戚。係二於道學之成否一。則夫之爲レ士者可レ不レ勉歟。元豐之乙丑。余官二於咸平一。治二其所レ居之西一。即二其舊一而完レ之。既潔以新矣。於レ是悉取二詩書古史一。陳二於其中一。有二誦習之牖一。有二休偃之席一。暑則啓レ扉。寒則塞レ向。朝夕處二乎其中一。取レ書而讀レ之。其甚憊也則卽レ席以休。以深思二其平日之所レ得。無二一日而不レ在レ是也。余惰者也。故取二古之道一而名レ之曰二進學一。而書二其説一。庶朝夕得二以自警一焉。

（『和刻　古今事文類聚　別集〈国文学研究資料文庫11〉』
巻之一・学術、ゆまに書房、昭和五十七年）

傍線部（『張耒集』では欠落している）に注目すると、張耒は元豊八年（一〇八五）、三十二歳の時に、役人として咸平（遼寧省開原）に赴き、その住居の西側をきれいにして、詩書や古史を取って、悉くその中に陳列した。誦習するための窓や、休むための席が有り、暑い時は扉を開き、寒い時は北窓を塞いだ。朝から晩までいつもその書斎の中に居て、書物を手に取って、これを読んでいた。ひどく疲れた時は席に着いて休み、平日得る所を深く反芻して、一日としてこの書斎にいないことは無かったという。彼は怠惰なので、古人と同様の方法を取り、この書斎を「進学」と名付けて、その説を書した。願わくは、朝夕に自らをいましめることを望んでいるという。と、いうのも、古の君子は、須臾として学ばないことは無く、それは例えば、飲食、遊観、疾病、死生に際しても、いまだかつて学ばないということは無かった。それ故に、その徳も、須臾として停滞することは無く、士人が聖人に至るのは、太陽が天をめぐるが如く、さも自然のことだったという。それに引き換え、後世の君子、今のいわゆる学者は、聖人になることができない。それは、本気で学ぼうとする姿勢が無いからである。彼らは大抵、数年間従仕すると、言語、笑貌、嗜慾、玩習のいずれを採っても、進取の気象があって、儒教で以って自らを言い表している者に比べると、大いに異なっている。古の君子の学びの姿勢は、内に対しては我が身を修め、外に対しては人民を治め、学ぶ所はいよいよ高く、治める所はますます修めて、功を成すことはいよいよ崇高である。したがって、君子が世に立つ時は、天下がその幸福を被っている。ところが、夏・殷・周の三代以降、儒者の功績が世にあらわれてお

らず、人民の望みを満たしていない。それは、士人の学がいまだに至らず、道が立たないからである。人民の喜憂は、道学の成否にかかっている。

観中が、張耒の書斎である「進学斎」を念頭に置いて、「少年老い易く」詩を作ったことは、確実に言えると思う。言わば、「進学斎」の斎号頌とでも言えようか。ただし、「進学斎の記」の中に、関連記事が殆ど見られない。「進学斎の記」は、儒家の立場に基づいて論が進められていると思われるが、張耒が同時代の儒者の態度に危機感を抱き、進学斎において一日として休むことなく、真摯な態度でもって学問に精進したことに深く共感して、観中は「少年老い易く」詩を詠出したのであろう。勿論、これは勧学の詩である。

四　『翰林五鳳集』の編集方針管見、惟肖得巌のメモ癖

ここまで来ると、一つ大きな問題点が残されていることに気付かれるだろう。「少年老い易く」詩を観中中諦の作と仮定すると、それが一体どうして、惟肖得巌の作として『翰林五鳳集』に収録されているのだろうか。この問題点をクリアできなければ、当該詩を観中の作と断定することはできない。

『五鳳集』に収められている惟肖の作品で、彼の外集である『東海璚華集』に確認できないものは、「進學軒」詩の他にも、多数存在する。ただし、今のところ他人の作が、惟肖の作として『五鳳集』に収録されている用例は、見出し得ていない。『五鳳集』に関しては、蔭木英雄氏に一連のご労作があり、[7]「成立の事情」や「撰者」、「書写」、「構成及び作者」について綿密に言及されているが、全六十四巻で収録作品数や作者数（二〇四名）が膨大なためであろう、残念ながら収集源や編集態度についての記述は無い。大日本仏教全書本『五鳳集』[8]は「誤字誤植の多い悪本」であるが、試みに絶海の作品に注目することで、『五鳳集』の収集源や編集態度の傾向を探ってみたい。絶海の『蕉堅藁』の伝本は同一系統で、いずれも五山版から派生している。当然、詩文の取捨による異同も無く、配列順序も殆ど同じである。[9]加えて、詩の総数も少ないので（計一七二首、他作七首を含む）、調査するのに非常に便利である。

紙数の都合上、ここで調査結果の全貌を紹介することは避けるが、題名や作者名が無い詩が散見したり、七言律詩（『蕉堅藁』三十五番詩）を絶句二首分として収録する（巻第六十四）など、『五鳳集』のかなり杜撰な編集態度が露呈された。同集に『蕉堅藁』収載詩は、全一七二首中一四四首収められていて、『蕉堅藁』に未収録の詩は、『五鳳集』巻第四十八に三首確認できる。そのうち「畫馬障子　二首」は、横川景三の『小補東遊集』（『五山文学新集』第一巻所収）に確認することができる。岩山氏は、『五鳳集』の作者の信憑性は割合高いといった旨のことを述べられていたが、同集所収の「進學軒」詩を、無条件に惟肖作と断定するのは、聊か危険な

ようである。

また、『蕉堅藁』八十九番詩は、『五鳳集』の巻第十九と巻第四十一に重複して収められている。ただし、少しく異同がある。

○蘭生幽谷獨開花。藹々國香堪自誇。寂莫楚江無逐客。孤芳移在野僧家。秋蘭　　絶　海（巻第十九）

○蘭生幽谷獨開花。藹々國香堪自誇。寂莫楚江無逐客。孤芳移入埜僧家。僧窻移蘭　　絶　海（巻第四十一）

これは明らかに編集ミスであろうが、ミスから顕在化して来る事柄があるのは面白い。じつは、『蕉堅藁』の八十九番詩は、『花上集』（『続群書類従』第十二輯上所収）にも採られていて、『五鳳集』の巻第四十一収載詩は、これによるものと思われる（巻第十九収載詩は『蕉堅藁』による）。なぜなら、異同が認められる詩題と結句が一致しているからである。[10]『花上集』は『百人一首』と同じく、室町中期の五山禅僧二十名の七言絶句を各十首ずつ、合計二百首集めた詩選集である。某僧が建仁寺の少年僧文挙契選のために編集し、横川が命名した（彦龍周興〔一四五八～九一〕の序文による）。長享三年〔一四八九〕成立。また、『五鳳集』の跋文に、

本邦所二選纂一。有二百人一首。花上集之兩帙一。近代風騷耆宿賦レ之。取下有レ補二於詩道一者上。盡擇二其精一錄レ之。然則禪必通レ詩。詩必通レ禪。禪詩共有二妙悟一。豈不レ快乎。

（訓点は私に施した）

という文章があることからも、『五鳳集』の収集源の一つとして『花上集』を指摘することができると思う。合わせて『百人一首』も収集源の一つに数えることができるだろう。と、いうのは、『五鳳集』に一首しか採られていない禅僧の詩の大部分、例えば汝霖妙佐「梅花帳」（巻第六）、鄂隠慧奫「除夜有所思」（巻第二十三）、古剣妙快「招人」（巻第二十五）、無求周伸「寄故人」（巻第三十八）、中岩円月「壇浦」（巻第五十三）、寂室元光「書金籠（蔵）山壁」（巻第五十四）等、それから観中中諦の「賛王荊公」（巻第六十一）も『百人一首』に採られているからである。なお、すでに堀川貴司氏が指摘された[11]「等持院屏風賛」（『五山文学新集』別巻一・「詩軸集成」所収）から採った一首（夢窻疎石「諸大老十二景之眞跡在北山等持院／瀟湘夜雨」〈巻第五十二〉、無悳至存（孝）「山市晴嵐」〈同上〉、乾峯士曇「題名ナシ」〈巻第四十六〉等）もある。以上、稿者は、現段階では、『五鳳集』の収集源として各禅僧個人の外集（散佚したものや、未発見のものもあるだろう）、「等持院屏風賛」に加えて、『百人一首』と『花上集』を考えている。さらに精査を重ねれば、新たな収集源を追加できるものと思われるが、それは他日に期したいと思う。

稿者は、これまでに何度も拙稿で取り上げたことがあるのだが、建仁寺両足院蔵『東海璚華集（絶句）』は、非常に興味深い本である。本の構成は、少々複雑である。玉村氏の「解題」を参考にして

纏めると、以下の通りである。

一、惟肖得巌の七言絶句。二〇九首。

二、惟肖の五言絶句。二二首。

→一、二は、史料編纂所本『東海瓊華集』所収のものと多少出入りがある。文言にも多少の相違がある。

三、江西龍派〔一三七五～一四四六〕の七言絶句および七言律詩。一〇〇首（実際は八五首）。

→先輩僧惟肖に呈示して、添削を求めたもの。

四、俗詩（五言絶句）。六四首。【例】東方虬・司空圖・韋應物（蘇州）・貫休（禪月大師）・陸龜蒙・李商隠（義山）等。

五、惟肖の先輩五山僧の七言絶句。一〇六首。【例】義堂周信・絶海中津・無求周伸・雲溪支山・觀中中諦・中巌圓月等。

そして玉村氏は、以下のように指摘される。

この本は、江戸初期の寫本であるが、その親本となつた本は、或は惟肖の草稿本であつたかとも思はれる。その故は、この本に收められてゐる所の惟肖の作品以外のものは、一見雜然と書きつづけられてゐるやうに見えて、實はいづれも惟肖に關係のあるものばかりで、江西龍派の作品は惟肖に呈似（ママ）されたもの、俗詩は惟肖が諸本渉獵の際書留めておいた覺え、義堂・絶海等の詩は、作品がいづれも惟肖に關係の深い人のものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉學のために抜萃して座右に備へたものと考へられないこともない。して見ると、この本は惟肖自筆手澤の草稿本の俤をつたへるものとして貴重である。（以下略）（一三〇一頁）

これによると、惟肖には、いわゆる〝メモ癖〟とでも呼べるような性質があったのではないだろうか。この本には、中国の詩人や、江西龍派、五山の先輩僧の詩がメモされているが、例えば観中に関しては、「許由乘瓢圖」（a）、「中秋前一日寄穎川」（b）、「淵明種柳圖」（c）、「送行」（d）という四首が記されている（記号は私に施した）。このうちc詩は、先の梶谷氏【観中録・青嶂集】に見受けられず、残りの詩は、題名や、詩句の文字に異同がある（a詩は「棄瓢圖」〔八〇〕、b詩は「八月十四夜寄人」〔九二〕、d詩は「話別」〔八九〕）。さらに想像を逞しくすると、惟肖は、勉学の際、先輩僧観中の「進学斎」詩をメモし、それがいつの間にか惟肖の作品と混同してしまい、『五鳳集』に採集されたのではなかろうか。そしてその際、詩題の「進学斎」が「進学軒」に、また転句の「枕上未醒芳艸夢」が「未覺池塘芳草夢」に書き改められたのであろうか。ただ、前者に関して言えば、たしかに「書斎」と「寮舎」は、時代がくだるとともに同義になって来るが、ここでは改めるべきでは無かったと思う。なぜなら張耒や、彼の「進学斎」の存在が、全く想起できず、見失われしまうからである。

おわりに

以上、「少年老い易く」詩の作者（出典）問題に終止符を打つまでには至らなかったが、新たな出典候補として、観中中諦の『青嶂集』を紹介した。今まで出典として報告されて来た、どの作品よりも古い出典である。詩題は「進学斎」となっており、観中の周辺に「進学斎」という書斎が存在したのであろうが、もともとは張耒の「進学斎」を詠じた斎号頌のようなものだったのではないだろうか。したがって、稿者は、結果的に同詩が勧学詩になり得たと考える。また、転句は「枕上未醒芳艸（草）夢」となっており、これが後世への伝流過程において、「未覚池塘春草夢」→「未覚池塘芳草夢」と変遷したことが推測される。稿者は、同詩が『翰林五鳳集』において惟肖得巌作となっていることについて、『五鳳集』の編集態度が杜撰なこと（作者名も全面的に信用することはできない）、惟肖の〝メモ癖〟故に混同したのではないかということを指摘した。個々の作品間における伝流状況に関しては、柳瀬氏や岩山氏の説を出るものは何も無く、推測に推測を重ねることになるので、ここでは、あえて言及しない。

ともあれ、五山文学は、従来から「傍流の文学」とか「学界の孤児」という汚名を被って来た。これは、ひとえに我々研究者の責任であろう。本文、注釈、作者、成立、用語・語法、内容・特質、いずれの研究もあまり進んでおらず、五山文学研究の第一人者であった玉村竹二先生も、平成十五年十一月に逝去され、つねに五山文学研究者の周りには、「憂鬱」が渦巻いている。[12] しかし、柳瀬氏の言われるように、それは「近代日本が学校教育に課していた有為な人材を養成するという目標に沿って」（③）、朱熹（朱子）に仮託して明治期の漢文教科書に掲載されたためであろうが、我々に相当馴染みが深く、日本人の精神へ多大なる影響を与えた「少年老い易く」詩の作者が、じつは、五山の禅僧としてはそれ程知名度が高くない観中中諦の可能性が高いという事実は、わたくしにロマンを感じさせるとともに、わたくしの五山文学研究に対する情熱を掻き立てるのである。

注

(1) 絶海中津との交流に関しては、拙稿「「和韻」から見た絶海・義堂」（『古代中世国文学』第二十号、平成十六年一月）、『臥雲日件録抜尤』宝徳元年（一四四九）七月十一日条、『碧山日録』寛正元年（一四六〇）五月二十二日条等参照。義堂周信との交流は、義堂の日記である『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）に描かれている。

(2) 水元日子・鷲野正明・宇野直人氏「哲学者の横顔―朱子の詩と詩論」（『漢文教室』第一六〇号、昭和六十三年五月）。

(3) 玉村竹二氏『五山禪僧傳記集成』（講談社、昭和五十八年）、中川徳之助氏「惟肖得巌年譜考」（『安田女子大学大学院開設十周年記念論文集』、二〇〇三年十二月）参照。

(4) 引用は『癸未版　錦繡段』による。

(5) 張耒の現存文集は、『宛丘先生文集』七十六巻、『柯山集』五十巻（『四庫全書』所収）、『張右史文集』六十巻（『四部叢刊』所収）、明の嘉靖三年（一五二四）刻本『張文潛文集』の四種に分類され、それらを整理校訂したのが、中華書局本『張耒集』六十五巻である。

(6) 『日工集』永和二年（一三七六）三月十五日条参照。また、例えば、張耒の作品（巻之七・長短句「磨崖碑後」、巻之八・歌類「七夕歌」）が採られている『古文真宝』（黄堅編）の抄物『古文真宝桂林抄』（『続抄物資料集成』第五巻所収、清文堂、昭和五十五年）にも、『事文類聚』からの引用が多数見られる。

(7) 蔭木英雄氏「『翰林五鳳集』について―近世初期漢文学管見―（一）（二）（三）」（『相愛大学研究論集』四・五・六、一九八八年三月～一九九〇年三月）。

(8) 玉村氏は、「もちろん撰進した原本は失われてしまっているが、現存の諸写本のうちでは国会図書館所蔵の二本のうちの相国寺雲興軒旧蔵本（旧帝国図書館本）が最も古いものである。この本は雲興軒主雪岑梵崟の書写手沢に成る本であり、（中略）『全仏』（『大日本仏教全書』の略、朝倉注）はおそらくこの本を底本にし、諸本を参酌したのであろう」（「解題」）と述べておられる。

(9) 拙稿「絶海中津『蕉堅藁』の伝本について（上）―諸本概観―」（竹貫元勝博士還暦記念論集『禅・文化とその周辺領域（仮題）』所収、平成十七年新春刊行予定）、「絶海中津『蕉堅藁』の伝本について（下）―諸本間の関係―」（『禅学研究』第八十三号、平成十七年一月）参照。

(10) 今泉淑夫氏によると、『花上集』には、続群書類従本系統の写本と、それとは別系統の慶応義塾大学付属図書館の一本があり、慶応図書館本の詩題も「僧窓移蘭」。結句は不明。今泉氏「『花上集』について」（『東京大学史料編纂所報』第十八号、昭和五十八年）参照。

(11) 堀川貴司氏「『等持院屏風賛』について」（『国語と国文学』第六十九巻第五号、平成四年五月）。

(12) 朝倉尚氏は平成十六年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（於　広島大学学士会館2Fレセプションホール）の第二日目（十一月二十八日）、「禅林文学研究者の憂鬱―義堂周信の著作物をめぐって―」という題目のもと、公開発表をされた。氏は、義堂の『空華集』や『新撰貞和集』『重刊貞和集』の本文に関する問題点を例に挙げて、禅林（五山）文学研究者が屢々直面する「憂鬱」の実態を説明されるとともに、その中で時折見出せる一縷の「光明」を紹介された。

【付記】
本稿は、広島商船高等専門学校　教育研究活動等助成金　第二号（五山文学の研究）による研究成果である。

―あさくら・ひとし、広島商船高等専門学校―